

卷 頭 言



あ る 朝

経営研究部長 齋 藤 信 夫

近くの小学校に通う児童たちの元気な声が、4階の経営研究部室まで聞こえて来るのを、毎朝楽しみに待つようになった。そんなある朝、いつもの調子とは違った、一際甲高く、弾んだ声^{はず}が、今開けた窓から飛び込んで来た。驚いて見おろすと、集団登校の列に、野良ねずみが紛れ込んだらしい様子。何かの拍子で、道路わきの下水から出て来たのであろう。喚声を上げる彼らを見ながら、ふと、「虹^{にじ}を見て、心躍らざりせば、われ死にたるも同然なり。」という詩句を思い出した。ねずみといい、虹といい、目新しくもないものに、叫びを上げたこの子供たちや詩人のように、日常見慣れた事物に対して、ある種の感動を覚える柔軟な感性、みずみずしい感覚を、私は失ってしまっているのではないかと心したのである。

“Man was made to grow, not stop.”（人は、成長するために作られたもので、停止するためではない。）という言葉があるが、私たちは、あるものを脱ぎ捨てて、あるものに成ろうと進み行くべき存在であると思う。このことは、人の一生が、内なる人の日々向上進展にあることを意味していると思う。

従って、朝目覚めたとき、今日も一日生きることができると、感謝と喜び、希望と責任の混じり合った感動を覚えて、じっとしていられない心のほとばしりをもって一日をスタートしたい。目に触れるもの、耳にすることに、美しいもの、善きもの、真なるものを見だし、生の畏れ^{おそ}から生ずる感動をもって、その日果たすべき一事一事を慈しみ、瞬間瞬間に充実して、「意味を完結した生」とすべく精進したい。様々な出来事に遭遇しながら、その中であって、「足ること」を学び、「外なる人は破るれども、内なる人は新たなり。」との感動の叫びを発して一日を閉じたい。

さて、「子供は、感動がなければ理解しない。」とされている。私たちによって与えられる諸種の感動を通して、児童生徒は物事を理解し、体験領域を広げ、深めて、心身の成長発達を遂げていくのであろう。それらの感動を与え得る根源となるものは何であろうか。私たち自身が、日々の営み^ぐの中で、絶えず、内なる人の向上進展を志向して生きるとき感得されるところの、言わば「求道者的感動」が、それらの根底に必要であろうと思う。教える者の出発点はここにあるのではないだろうか。